

祭魚洞文庫 『筑前紀行』 について

はじめに

流通経済大学図書館の祭魚洞文庫には貴重な古典籍が多数収められているが、この程その中の一冊『筑前紀行』を読ませていただく機会を得た。本稿はその概略を紹介し、内容の一部に考察を加えたものである。

1 体裁・内容

本資料は、祭魚洞文庫図書番号571215714『筑前紀行』上、中、下で、登録票に「千坂高就著、宝永二年、写本三冊、絵入（箱入）」とある。冊子は、「筑前紀行 上中下」の張紙のある木箱に収められている。

書冊は縦約二十四センチ、横約十九センチの和綴じ本で、裏打ちした茶色表紙には各々「筑前記行 上」「筑前驛行 中」「筑前紀行 下」の題簽が張られている。上巻第一丁に「巖松南古典部波多野掙斯書」の

水野 恵子

蔵書印が見える。丁数は上巻五十六丁、中巻七十丁、下巻七十九（白紙一）丁である。以下、小稿において書名をいう場合は『筑前紀行』に統一し、本紀行作者については「著者」として述べることにする。

本文は一葉ごとに枠線が引かれ文章は十六行を基本とする。絵は全葉に描く場合と、上下に分けて下段に置いている場合がある。

本書は江戸時代前期の紀行であり、その題名から明らかなように筑前への旅行を記録したものである。ただし、内容は著者の日々の具体的行動の記録よりも、訪れた地の歴史や名所旧跡の説明が量的には多い。

特色としては、まず多数の挿絵があることだ。著者の旅の行路、訪問地を次々につないだ道中画、名所の風俗画などで、丁寧な彩色されたものが多い。また京、大坂の町絵図、内裏、大名屋敷などの建物平面図もある。

次に、著者の詠んだ歌が多数含まれていることである。歌だけでなく俳諧、漢詩もあり、著者の教養、趣味がうかがい知られる。

さらに、注釈が多いことである。それらは訪問地の名所旧跡について

の説明であるが、その外にも本文の行間、欄外に細字で記されたものがある。このような注記には、出典が記されているものが多い。「春秋紀行、鴨長明『道の記』、東海記行（春齋紀行）、旅雀、雍州府志、新編鎌倉志、大坂記、古事因縁集、京織留、東国太平記」等の書名が見えるが、特に繰り返し引用されて目立つのは『雍州府志』である。

『雍州府志』十卷十冊は貞享三年（一六八六）刊、医師、儒者、歴史家である黒川道祐（——元禄四（一六九一））が京の地誌を漢文で網羅的に詳述した著作である。「雍州」とは京都を、「府志」とは風土記を意味する。

『筑前紀行』の著者は一通りの編集を終えた後、これを辞書のように参照しながら自身の原稿に書き入れていったのではないだろうか。引用は上巻で書き込み十五箇所、さらに最終二丁分全部を二十五項目についての引用に当てている。下巻にも『雍州府志』出典引用は、二十一箇所に及ぶ。

近世紀行は主情的、詠嘆的傾向よりも、知的で、情報的伝達を重視したものが多くなるといわれる。一概にそのような特徴を有すとはいえないようだが、この『筑前紀行』は、『雍州府志』を中心に各種先行紀行、道中記類を参照し、できるだけ客観的なものとして自己の旅行見聞を整理記録し、保存しようとする意図があったのである。

2 旅行の目的

本旅行の目的は、上巻冒頭に次のように記されている。（以下、紀行原文の引用においては、漢字は常用漢字及び通行の文字を用い、また漢字表記、合字の助詞は平仮名に直す。変体仮名、片仮名も平仮名に統一したが、仮名遣い、濁点の有無は原文のままである。文章には適宜句読

点、括弧「」を施した。また「」中に読みや意味を記したところがある）

筑前記行

序

古人もすと日記といふ物を我もしてみんとするなり。その年しわすひとひの日、筑前の太守始て国へ暇給はりて同し月、中の八日に武蔵を立給ひぬ。予かかしつき奉る御方にもよせおもき中と成給へは、悦ひの使やり給はんとて、同しき末の七日の暮に至て筑前への使价をかふむれり。延々ならぬ旅なれはとくしてとさそはれて、取物もとりあへぬ心地して、只二日のいとなひにて、明る年睦月一日の卯の刻に首途す。その由聊か物に書つく。（E一ウ）

これは、よく知られている紀貫之『土佐日記』の冒頭「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり。その年の師走二十日余り一日の日に門出す。そのよしいささかにもに書き付く」を踏まえた文章である。

内容とするとところは、「ある年の十二月一日、筑前の太守が初めて帰国の許しを得て、十二月十八日に武州江戸を立った。自分がお仕えする主君も信望重き立場になられたこともあり、祝いの使者となるべき仰せを受けた。命が下ったのは、十二月二十七日であった。ただ二日の準備で、翌年の一月一日、朝六時頃に出発した」というのである。

この旅の目的は、この後の上巻一月二十三日に、また中巻の筑前福岡城で、下巻でも京伏見で、また終結部でというように繰り返されている。

上巻一月二十三日夜、入京前の関宿にて著者が詠んだ北野天満宮奉納歌仙序文には「宝永しと改りぬる申の年、臘月初めつた、筑前の刺史

吉之公、始て国へ下りたまふに、祝言の使をかふむりて思わすも明る二とせの睦月の一日に古郷を出て」(上18才)とある。

ここから、さらに次のような事情がわかつてくる。当時の筑前、福岡藩主は第四代の松平(黒田)肥前守綱政であるが、その綱政嫡子、吉之が初めて暇を得て帰国するのを祝い、主君が著者を使者として福岡に派遣した。その記録がこの『筑前紀行』であるというのである。当時大名の世子は江戸で過ごすのが習わしであり、ここで「筑前太守」「筑前刺史」としているのは、次の藩主の意であろう。

黒田吉之は天和二年(一六八二)生まれで大隅守を称し、暇を得た宝永元年(一七〇四)には二十三歳だった。この帰国の記事は福岡藩「御年譜集要抄」に「宝永元年甲申 十二月朔日 吉之公初而御暇 同二乙酉二月三日 吉之公御着城」のように見ることができ^{注2}る。

ただし、吉之は宝永七年(一七一〇)、二十九歳で父綱政に先んじて死に、弟宣政が第五代藩主となっている。

この時、使者を送ったのは、米沢藩第五代藩主、上杉吉憲である。使者が米沢藩の人物であることは、歌仙の終わりの「宝永二乙酉曆二月廿五日 羽州米沢侍従上杉氏家士鉄孫左衛門源景泰」の署名から明らかである。

米沢藩では、元禄十六年(一七〇三)八月二十一日、第四代藩主、上杉綱憲が病身のため四十一歳で隠居、翌宝永元年(一七〇四)六月二日に没している。嫡子上杉吉憲は二十歳で家督を継ぎ、従四位下民部大輔から同侍従へと進んだ^{注3}。先の序における、著者がかきずき奉る御方がよせ重き地位に就いたというのは、このことをさす。新藩主となった吉憲は、次の「筑前太守」たる黒田吉之の初入部の祝いのため、使者を出したのである。なお、歌仙を巻いたのは一月二十三日だが、著者は北野と太宰府の天満宮に一卷ずつ奉納するつもりであった。太宰府は二月

二十三日に参拝したので、北野は二月二十五日の日付を記したという。使者に任せられた著者は、宝永元年(一七〇四)十二月が小の月で二十九日で終わったので、翌二年元旦出発の準備には二日しかなかったというのである。

『筑前紀行』の使者のことについては、『上杉家御年譜』七、吉憲公御年譜巻五、宝永二年乙酉一月十四日の項に「松平大隅守吉之始テ官暇ニテ 筑前福岡へ帰国ノ賀使鉄孫左衛門景泰 筑州ニ赴ク(中略)四月六日 江府帰着拜謁言上ス」と見える^{注4}。一月十四日は本紀行では江戸出発の日である。

3 旅行の日程

日程は、上・中・下巻の構成から見ると次のようになる。以下地名はそれぞれの日の最終到着地、宿泊地を示す。

宝永二年(一七〇五)

○往路

〔上巻〕

一月一日 庭坂、二日 本宮、三日 白川、四日 大田原、五日 宇都宮、六日 猿手、七日 江戸藩邸、八日 同、九日 同、十日 同、十一日 同、十二日 同、十三日 同、十四日 江戸発、戸塚、十五日 小田原、十六日 沼津、十七日 江尻、十八日 金谷、十九日 浜松、二十日 赤坂、二十一日 宮、二十二日 桑名、二十三日 関、二十四日 草津、二十五日 京屋敷、二十六日 同、二十七日 同、二十八日 伏見より乗船、大坂

〔中巻〕

二十九日 同、三十日 同、安治川、船中泊、

二月一日 同、二日 同、三日 同、四日 同、五日 播磨灘、

六日 牛窓、七日 同、八日 日比、九日 只海、十日 同、十一

日 蒲葺、十二日 同、十三日 同、十四日 鹿籠渡島、十五

日 津和、十六日 上の庄、十七日 向、十八日 筑前上陸、若

松、十九日 赤間、二十日 箱崎、二十一日 福岡、二十二日 同、

二十三日 同、二十四日 同、二十五日 同、二十六日 同、

○復路

二十七日 福岡発、船中泊、志賀島、二十八日 藍の島、二十九日

出崎島

〔下巻〕

三月一日 同、二日 若松、三日 下関、四日 同、五日 田浦、

六日 下関、七日 同、八日 同、九日 上関、十日 宮島、十一

日 音戸、十二日 高島、十三日 鞆、十四日 同、十五日 同、

十六日 室、十七日 兵庫、十八日 同、十九日 大坂上陸、枚

方、二十日 京屋敷、二十一日 同、二十二日 同、二十三日 同、

二十四日 同、二十五日 京発、草津、二十六日 関、二十七日

宮、二十八日 赤坂、二十九日 浜松、

四月一日 島田、二日 江尻、三日 沼津、四日 小田原、五日 戸

塚、六日 江戸藩邸、七日 同、八日 同、九日 同、十日 同、

十一日 江戸発、〔猿手〕、十二日 雀宮、十三日 大田原、十四日

白川、十五日 本宮、十六日 庭坂、十七日 帰郷

上巻は序に続き、一月一日からの旅の日録であるが、江戸桜田の米沢藩上屋敷に到着するまでは、宿泊地宿名を記すのみで詳しい記事はない。

米沢から七日で江戸に到着し、江戸には七日滞在して出発、東海道を西下する。ここからは各地の名所説明が詳しくなる。

江戸を出発して十二日目に京都三条下ル、道祐町の藩の京都屋敷に着く。ここは正式藩邸ではなく、表向きは藩の御用商人、西村久左衛門の屋敷とされていた。著者は往路はそこで三日間、復路は五日間過ごし、西村久左衛門親子から手厚い世話を受けている。

このように上巻は一月一日、米沢出発、一月二十八日、京都伏見より淀川を船で下り、一月二十八日、大坂に到着した所で終わる。

中巻は大坂を船で発した一月三十日から、著者一行は福岡藩手配の船で瀬戸内海を往復している。往路は小早船、渡海船の二艘で、二月十九日、筑前若松に上陸、陸路三日、福岡城下に入る。著者は、すでに月初到着していた黒田吉之に二十二日登城面会して、任を果たす。そして、藩より接待を受け太宰府天満宮参拝も済ませて、二十七日には帰国の途に着いた。復路は全員が大船一艘に乗り、乗船三日目の二月末日までが中巻である。

下巻は、帰途三月一日よりの記事で、瀬戸内海を再航、十九日に大坂に着いている。二十日、京の屋敷に着き、五日ほどあちこちを見物した。また、江戸から筑前への帰国途中にある福岡藩主黒田綱政を伏見の宿に訪ねて挨拶しているが、この綱政訪問は江戸を立つ時の主君吉憲の命であった。

二十五日には京を立ち、江戸藩邸に着いたのは四月六日である。著者は藩邸の吉憲に復命し、その後、四日ほど休息して江戸を後にした。故郷に到着したのは、四月十七日であった。

出発の初めの頃は、瀬戸内海においてさえも「折々に雪飛ちる。寒き事古郷の冬より増れりと覚ゆ」（二月十三日、中29ウ）と寒気に苦しめられた。しかし、帰路再訪した京は桜も今を盛りの春で、帰り着いた故郷

も残んの花が青葉に見え隠れする初夏となっていた。米沢より筑前往復、全行程百五日に及ぶ旅行はこうして終わったのである。最終章に著者は、その感慨を記す。

それより住なれし庭をみれば、雪もよう／＼弥生の末つかた消尽せりとして、爰かしこいまた春のけしき残りつ、鳥の声珍敷音信（おとずれ）て、夏ともみえず。やうはいとうり（楊梅桃李）の木すゑ青み渡りて、九重の空をも思ひやられるれ、都方の庭作りとは引替りてひなひたり。桜も青葉ましりに咲残りて、又古郷の春をもしれり。長き舟路より是をのみ願ひしにとおもひてとくせんの即興を書と、めり。

けふこそはかへり都の家さくら青葉ましりに咲のこりつ、

（下73頁174ウ）

4 使者の任務

本書文章の特色として、訪問地の名所旧跡の説明が多いことを指摘したが、公務に関するところは別で、その叙述は詳細を極めている。ここでは使者としての著者の活動を見たいと思う。

著者一行は米沢を出てから江戸で大坂出身駕籠舁四人も含め、上下合わせて二十一人に編成される。常に著者の身近にあつて働いている部下は、「御手明、今井伝左衛門」である。手明は中級藩士で、藩主の信頼厚い旗本家臣出自である。

福岡藩世子吉之への進物は、熨斗目など五領、太刀、御馬代黄金十両、塩鮭等々であり、京都屋敷にて、長持二棹に入れ替えて運んでいる。

福岡で著者は宿舎より行列して城に向かい、人々から下座の礼を受け

た。米沢藩公式使者である著者は、相手方福岡藩の接待内容を簡条書にして詳しく記録している。例えば行列編成は図示、対応した相手方については、その人数、氏名、地位、年齢、紋所の一々まで記している。

二月二十一日、著者は米沢藩主上杉吉憲の挨拶を申し入れ、翌二十二日、黒田吉之に拝謁する。賀儀贈進は、隠居の先代藩主、右衛門佐光之にも行われた。米沢藩からの挨拶は、吉憲のもののみならず、亡父綱憲正室の円光院、先々代藩主綱勝生母の生善院の口上もあった。二人の女性は今まで幼君を支え、藩存立のため力を尽くしていた。注6

著者はこの後、「主君吉憲は、去年の普請工事の功により今年は二月中暇を許され帰国の予定なので、主君が江戸を立たないうちに報告をしたい」と福岡藩側の返答を催促している。上杉吉憲は前年宝永元年（一七〇四）江戸城石垣普請を命じられて八月に完成させている。二十五日、著者は吉之、光之の返答を得て、二十七日に福岡を退去した。返礼には、銀子二十枚外粕漬鯛、鯉、練酒などがあつた。

御殿の座敷平面図には、二十二日、二十五日両日の相手方の位置、著者の入退室、拝礼、着座の位置等の一々がわかるように、移動を線で示し、説明を加える等入念である。（以上、中巻）。

江戸藩邸に着いた著者は、主君吉憲より「遠境太義」のねぎらいの言葉を受ける。旅行途上の書状未済の報告として、著者は特に京伏見で綱政のもとに参上した件を家老色部を通して伝えている。

続いて著者は円光院、生善院にも報告に伺うが、円光院は春よりの病で取り込み中であり、早々に退出した。

年譜によれば、上杉吉憲はこの後閏四月十六日に米沢に入部したが、円光院は同じ閏四月二十五日に、生善院は翌宝永三年（一七〇六）八月十七日に死去している。注7

なお、大名家間の縁戚関係は、互いの家の存立のために積極的に図ら

れたのであるが、この頃の米沢藩と福岡藩との間には、次のような事情があった。

黒田綱政の娘久姫は、元禄六年（一六九三）に生まれ、吉之の妹である。元禄十二年（一六九九）久子（七歳）は米沢藩主吉憲（十六歳）と婚約、翌元禄十三年（一七〇〇）十一月に結納が行われた。『筑前紀行』の時にはまだ婚儀は行われていず、五年後の宝永七年（一七一〇）五月十四日に久子は十八歳で死ぬ。福岡藩年譜には、「久子卒 宝乘院 十八歳 上杉民部大輔殿^{（吉憲）}二許嫁有しか柳宮之凶変二婚儀延引せしなり」とある。この凶変には、赤穂浪士討ち入り事件がある。

なお、本紀行の下巻最後に記されている大坂から佐賀までの行程は、この時の旅とは別の、翌宝永三年（一七〇六）のものである。注記には「宝永三年十二月二日、松平信州綱茂公於肥前御卒去五十六。依之御先立の内、青木平内肥州え被遣十二月廿六日江戸出足、同四年二月廿八日江戸着、道中附」とある。この場合は船ではなく、陸路をとっている。

佐賀藩第三代藩主、松平（鍋島）信濃守綱茂の死去に当たったの使者だが、綱茂の母虎姫は上杉定勝の娘で、上杉綱勝の姉に当たる。第二代藩主、鍋島光茂室が虎姫なのだが、また上杉定勝室は初代佐賀藩主、鍋島勝茂の娘市姫であり、その人が虎姫の生母である。深い縁戚関係にあった米沢藩は、この時の綱茂の死に際して使者を送ったのである。なお上杉吉憲は久姫死後の正徳元年（一七一一）、第四代佐賀藩主鍋島吉茂の養女峰姫と縁組するが、峰姫も翌年十五歳で没している。^注

5 紀行の歌と俳諧

著者は文学の素養のある人で、旅行の途次、折に触れて和歌、俳諧などを詠んでいる。

中でも歌が多く、上巻 三十七首、中巻 四十六首、下巻 二十八首、全体では百十一首の多きに及ぶ。また、俳諧は上巻に発句二首、連歌三首、一通、歌仙連歌一通あり、漢詩は中巻に絶句一首、下巻に漢詩連句一通がある。

次は紀行の初めの部分、一月十四日の江戸出発の場面だが、最初の歌と句が出てくるところである。本章では、原文をやや長く引用する。

常の道には駕籠たてよといへと浦山の気色面白さに、駕史のよれるをも今少かなと思へり。与風（ふと）心にかみて、

ほの霞む此浦山のおさほらけつくしも春の気色やはたつ

といへる間に駕籠立ぬ。鈴か森なはてをゆくに西の田面に雁もかへさをわすれて豊かなる御代に求食（あさり）居たり。道の辺の真砂まてひとときは替り立継ける松の色も春めきて緑りをふ、めり。鈴か森に近付はおくりの人とみえてたたすめり。須田氏、色部氏より遙に爰まで人たふへり。浅からす返り言してやりぬ。深沢氏、志駄氏よりも人をそへられしをとかく言て、芝口より返しぬ。巳の刻頃より西風しきりに吹て、空曇なけれと今朝にはおとれり。六郷の渡りに行ぬれば、先達人こゝらこそり立ふさかり、たやすく渡るへき様もなし。小舟を雇渡りしに風つよふして、向ひの岸に上る頃、舟に水入てかろうして上りぬ。川崎を過、神奈川に至り、上の方海手の江戸屋といへる茶屋にて昼休みせり。所から高き岸に作りたる家なれば入海目の下にて、東にはほんもく近く見へ、舟のゆき、面白し。過し年地震に岸崩れたりとて築地なとして置ぬ。風やまねは沖は白波高ふして尾花をみるかことし。目もあやにまもり居て発句をなんしける。

たつ波に春も尾花の入江かな

船旅を続ける中で詠んだ歌には、紀貫之『土佐日記』を意識したものが多し。次はその中の一つである。

(一月十四日、上2ウー3ウ)

帆はひらきなれと舟走りて矢をいるかことし。山もありくやうに覚ゆれば、

追風に真帆かけつ、も漕ふねはやまも走りて行かと思ふ

土佐日記にもめのわらはの舟はやきに、山も行かとして読む歌に、「漕ほて行舟にてみれば足引の山さへ行を松はしらむほや」。此心にもかよひなんや。

(二月八日、中23オ)

著者にとって歌は、独自の創作を心がけるものではなく、先人の歌を鑑賞した上で、わが歌も詠み楽しむという態度に終始している。

次は帰路、播州室を出て船も大坂に近くなり、余裕の気持ちから歌も次々出るところである。

見やれば岡部立つ、きて桜も盛りなれば、

高砂のおのへのさくらさくころはそらにそしらぬ松のしらゆき

貫之の「桜ちる木の下風は寒からて空にしらぬ雪を降ける」の歌あまりの名歌なれば、桜ちると言、五文字はよむへからさる由、掟おきてを後成定家卿さため給へと、其後も二百迄読しと井蛙抄つゝしに書り、

是をき、て予かことときの口に此おもかけは恐れなれとも読かへて、かくいへり。〔中略〕

人丸の社、城の東面に朱の鳥井立て森みゆる。是も指て見所なし。

社も小さくみたる迄といへは、船より拝礼して取あへす手向ぬる。

ほのくゝとたてる鳥居もあかしかたあふかさらめやしきしまの道五文字は、かりあれと、所からにて御ゆるしもあらんかと也。舟子の曰、此浦にて、ほのくゝの歌をいへは、波荒て舟路にいむといへり。〔中略〕

是より淡路島間近くみえて、江島か磯も目の先也。下りし時は、夜るなれば、何もみず。けふは爰かしこ近く見やりて行。かれ是心計もためきて、口には出こねと筆に任せて書と、めり。

けふならて命の内はあわちかたゑしまかいそのすゑな霞そ

(三月十七日、下16ウー17オ)

著者の歌道経歴は長いようだ。先述の歌仙については、これを西村氏手代の田中忠兵衛に清書させ、桐の白木で額も作らせて、北野と太宰府の天満宮に一卷ずつ奉納した。歌巻末に「俳名委記すに及はね共、西国渡海の者、宰府え参詣せざる者は無之候。万人の見る所に候故、名を残置んため書入」と俳名は記さないが、自身の名前を記して、文人としての自負を示している。

帰路では、船出まもない夜に、筑紫名所の生の松原、箱崎松原、竈山等々をまとめて三十七首詠んでいる。

著者は陸路を移動する際は駕籠に乗るので、種々の事柄や歌詠について思いをめぐらしたり、記録したりするのに好都合であった。また、往復の船の旅では、十分すぎるほど時間があったのである。

6 絵地図式道中記と名所絵

江戸時代は交通路が整備され、参勤交代制実施、経済活動の活発化

などで各地を行き交う人も増加した。そして、旅路の宿駅、里数、名所、旧跡等を記した実用的な道中記が、多数出版されるようになった。

今井金吾氏監修『道中記集成』は江戸から明治時代に至る多数の道中記を集めているが、その解説（別巻三）によれば、十七世紀半ばごろから絵地図式の道中記が出されるようになったという。初期には部分的に挿絵を入れたものだが、絵地図式道中記は、街道の起点から終点までを絵として描くのである。そのようなものの初めとしては、『諸国安見回文之絵図』（寛文九年（一六六九）前後）がある。そこから次に生まれたのは、正確な縮尺によって描かれた大型本『東海道分間絵図』（元禄三年（一六九〇））で、その絵をかいいたのは浮世絵で名高い菱川師宣であった。そうしてこの後は趣向をこらしたさまざまな道中記が出版されてゆくのである。^{註12}

この『筑前紀行』上、中巻の挿絵は、一葉の上部に文章、下部に絵という形式にしてある。上巻は東海道の宿場を中心とした街道とその周辺の山川などに旅宿、神社仏閣、城などの建物が描かれ、貼付の短冊型黄色小紙片に地名、名称が書き込まれている。赤・青・緑・黄・茶・灰色のくすんだ色調の中に、城や寺院の白壁が鮮やかだ。

道には馬に乗ったり歩いたりしている旅人その他、動きある人の姿が描かれている。上巻は「江戸御城」(2オ)から始まり、「日本橋、山王宮、愛宕、増上寺、芝神明社」(2ウ)、「大仏、高輪」(3オ)と続き、京に着いてからは、「伏見、橋本、三島江、長柄川」と進んで大坂に向かう。見開きでつながるものもあるが、絵は四十三丁ほどある。

中巻は、巻頭に大坂城を東端にした大坂の町絵図(中1ウー2オ)が見開きで載る。港から船が動き出した二月五日から下段がまた絵になるが、今度は瀬戸内海を海岸沿いや島々の間を行く海路となる。海陸の複雑な地形も鳥瞰図なので見やすく、地名も丁寧に記載されている。船から見え

る海岸には人の姿も点在し、青い海、大小変化する波の形、松の緑、船の白帆などの美しい景が続く。

著者の船の往路は朱線で、帰路は墨線で引かれ、停泊地はそれぞれの色で丸印が付されている。絵は14オから35ウまでの二十二丁にある。上巻も同様だが、これら道中の絵図は連続して挿入されているので、文章と合致しているわけではない。中巻の絵は福岡藩より西の筑後、佐賀、大村から、豊岐、対馬のある日本海まで描き、最後は朝鮮国の海辺までを描いて終わっている。中巻には福岡城御殿の座敷平面図がある。

下巻の絵には、途中で一旦下船して見た一の谷の名所図があるが、これは市販の木版刷り一枚をはりつけたものようだ。外に京の図(34ウー35オ)と内裏図(下35ウー36オ)がある。「上巻、中巻には東海、西海の絵図にさへられて、都の図書人へき所なくて、もらし侍りぬ。只一表の内なれは、洛中計を漸々書て」(下34オ)と著者は記す。また西村に依頼して探してもらった内裏図も入れたのである。

下巻には京滞在中に訪れた名所旧跡の絵が載る。絵は、1壬生地蔵(37ウ)、2大通寺尼寺(39オ)、3東寺(39ウー40オ)、4太秦薬師(41ウ)、5大井川(42ウ)、6法輪寺(44オ)、7嵐山(44ウ)、8天竜寺(45ウ)、9野々宮(46ウ)、10雄倉山(47ウ)、11清滝川(48ウ)、12愛宕土器坂(51オ)、13愛宕山(51ウ)、14釈迦堂(53オ)、15広沢池(54オ)、16大学寺宮(54ウ)、17仁和寺(55ウ)、18妙心寺(56ウ)の十八図である。これらは名所旧跡に人物を配した単純な構図の絵である。

ただし、この紀行の絵は、中川喜雲『京童』(六巻六冊、明暦四年(一六五八)、山森六兵衛刊)の挿絵を元としているようだ。『京童』は解説に和歌、俳諧等を織り込み、挿絵入りの一般向名所記のさきがけである。その名所絵はイラスト風の風俗画で、画家は吉田半兵衛または野々口立圃といわれる。^{註13}本書では十八図中4、5、6、7、8、10、

11、13、14の九図は、地名と人物ともに『京童』挿絵と同じで、元の絵を写したものと思われる。が、残りの1、2、3、9、12、15、16、17、18の九図は原画を差し替えたり、省略、合成したり、いろいろに変えて使用している。これには既成の絵を著者の見た実景に近づけようとした意図もあったらしい。

特に興味深いのは、3東寺（下39ウー40オ）の絵である。ここを訪れたのは、三月二十一日、ちょうど御開帳の祭りの日に当たり、著者は西村親子に勧められて出かけている。

東寺の絵は見開きで、桜も咲き京中が群集したという賑わいがよく描かれていた。しかし、これは『京童』第一「子安の塔 泰産寺」「目やみの地藏 桂橋寺」「八坂の塔 高台寺」「双林寺」「霊山」、第三「千本閻魔堂」「下賀茂」、第四「永観堂」「伏見」「山崎」「鳥羽の恋塚」等々に出ている建物、人物などをうまく写して活用しているのだ。中には拝礼している男女の姿を反転させて使っているものもある。^{注14}

もともとの『京童』の絵自体がその地に結びついた特殊なものではなく、同書中で構図なども繰り返し使われているのである。それにしても、まったく違った場面の人物の動きを東寺の祭りの場面にはめこんで使っているのは著者のユーモアである。

上、中巻の道中絵図も著者が参考にしたものがあつたと思われる。東海道の薩埵峠の難所は、浜際の難路から明暦元年（一六五五）山の中腹へ、天和二年（一六八二）それからさらに上の山道になったといわれる。現在は安政元年（一八五四）地震による隆起で海岸側の道だが、この薩埵峠の道がどう描かれているかで、絵図の時代が知られ、『諸国安見回文之絵図』の刊行年は、山道ではないので天和二年以前かなどの議論がある。^{注15}本書でも実際に著者の歩いたのは山道だと記すのだが、絵図ではそのようになっていず、道は浜辺ではなく山の中腹あたりを通過してい

る。これは元の絵図に従ったものではないか。

なお、下巻の最後には、本州、九州の諸国名を記した地図が載る。この地図は通常の日本地図とは異なり、南が上、北が下になっており、老岐、対馬から朝鮮に至る航路と里程が記入されている。^{注16}

朝鮮は一部分で、釜山海、蔚山等の地名が見える。注記には「華夷通商考曰」として土産の品目、朝鮮八道の名が記されている。岩波文庫増補本には朝鮮八道の個々の名は見えないが、紀行では朝鮮語の読みも付している。西川如見『華夷通商考』二巻は元禄八年（一六九五）刊、著者同時代の著作である。^{注17}

著者は筑前の海を眺め見て、「爰を過て北の沖つ波、南北に島二つあり。南成島は白島とて筑前領、北成島は二子島とて長門領、此二島の間、長門、筑前の境也と言。是より西はまんくたる海原にて朝鮮口也」^{下2オ}などと記し、筑前の海を初めて見る感激とともに、異国につながる海に強く想像力を刺激されている。

7 編集過程と意図

詳細な注記と多数彩色画を挿入した『筑前紀行』の編集は、長期にわたって行われたものと思われる。

上巻、京の屋敷図に朱で「此御殿御長屋共宝永五（一七〇八）三月八日類焼。禁中共に炎上」の書き込みがある^{（上32ウ）}。本文中には後年の注記が見えるが、いちばん後のものは、上巻「吉田城主 久世讃岐守重之 五万石、松平伊豆守 正（正徳）二（一七一一）七月より」^{（上13オ）}である。旅行の終わった宝永二年（一七〇五）から七年後である。

このように紀行をゆるがせにせず書き残そうとした事情については、跋文に当たる章に、著者は次のように記している。

むかし 蓮心公御時島津左京通忠、肥前へ使价を勤し儘にて、映心公御代四十一年か間は西国へ行し者は独りもなくて此たひ我勤めり。君のめくみのおふけなき、いわんかたなし。からき舟路をも事故なく帰しは、天照皇太神宮をはしめ奉りて万の神仏を祈り奉りし御めくみと有難し。〔中略〕

むかし島津氏はさすか敷島の道にもかゝりし人の日記のなき事はあらしとおもへと、遙に程ふれば、尋聞ても、いつれの事をもはや今たにしらす。我は愚なる筆のすさみながら、年経て後むまこの聞及ひにも成なんと、かく浅はか成事をつゝりて、人に見すへきにもあらねは、物わらわれもいとひ侍りて、山鳥の尾にひとしき事を書置物ならし。

理書

千坂氏藤高就

全部

景泰愚草自画

宝永二乙酉卯月中の七日

かく書おはりて紀氏の「くみ見てもそこゐやはしる朝もよひ」の歌をおもひ出て、

としへてもかれなて残れもしほ草かきし我身はかきりありとも

（下73オ―74オ）

「蓮心公」は上杉綱勝で、正保二年（一六四五）より寛文四年（一六六四）まで藩主であった。この時代に一度島津氏が使者として出たが、その後の「映心公」―綱憲の時代の寛文四年から宝永元年（一七〇四）までは使者がなかった。著者西遊に際しては、その島津氏の記録もついに見なかったという。上巻の往路一月十九日には「石出氏

記行」に触れたところがあり、同僚家臣の旅行記は互いの参考にしたの
だろう。

著者は、めつたにない西国への旅を命ぜられたことを繰り返し感謝しているが、その記録を子孫のために書き残すのだというのである。

我が身は朽ちても、「藻塩草」――文章は後世に残し伝えたいという
思いは、最後の歌にこめられている。詳細な注記、挿絵も同様意図に
ろうが、必要あれば、公式の場で披見される可能性も予期したものであ
ろう。歌はあくまで余技であるという、繰り返しの断りもそのような場
を予想したものだっただけかもしれない。

8 終わりに――著者について

跋文には著者と思われる「千坂氏藤高就」「景泰」の二人の名が記さ
れている。後者は、連歌歌仙署名から「鉄孫左衛門景泰」であることが
わかる。

鉄氏のもと黒金氏といい、祖先には上杉景勝の越後での拠点の一つ、
春日山城の城将だった黒金上野介景信（註18）がいる。その養子黒金泰忠は、伏
見総構普請の奉行を務め、土木の才に優れていた。將軍秀忠により大坂
夏の陣の戦功の感状に「鉄」とあったことから、黒金を鉄と改め、その
後も江戸城石垣工事普請、その他を指揮したという。（註19）

『筑前紀行』の鉄孫左衛門景泰は米沢藩「御家中諸士略系譜」によれば、
黒金泰忠の曾孫で侍組五百石取の上級藩士である。しばしば使者に任せ
られ後に荒砥御役屋の将となり、正徳五年（一七一五）致仕した。（註20）紀
行中には建物平面図等載せ、京屋敷の図には「右逗留中一進の心覚迄
にて間数書付、帰郷の上書候故そこく相違可有候歟。御屋敷間数は役
人中御留書写之」（上32ウ）等の注記も見える。福岡藩では特に城内書院の

見学に便宜を図ってもらい、途中記事でも宝永元年（一七〇四）の新大和川工事や河村瑞賢の河川工事に触れたりしているのも、自身の関心によるものだろう。自分で全部描いたという絵も巧みである。

千坂氏は越後国沼垂郡の豪族で、藤原姓、上杉庶流、扇谷朝宗の孫高春が千坂氏を称した。後世米沢藩で代々家老となった家である。江戸城刃傷事件翌年の元禄十五年（一七〇二）赤穂浪士仇討ちの時は、江戸家老千坂兵部太郎左衛門高房が吉良邸を守ったとされるが、実際の千坂兵部は元禄十三年（一七〇〇）に六十二歳で世を去っている。千坂氏藤高就はその兵部高房の弟の浅右衛門高就である。高就は千坂安芸高治の三男で綱憲代、小姓頭を務めた。侍組二百石を得、享保元年（一七一六）隠居している。^{注22}

さて千坂氏は本書の「理書」をなしたという。それは絵の説明の文章を書いたとも思えるが、氏が部下を実際に引き連れて旅し、紀行文をなしたという証跡を文中に見ることはむずかしい。公式の場では鉄氏が自分の名を使者としてまず名乗っており、千坂氏の存在を思わせるような記述がない。全部とした「愚草」は自己の草稿をへりくだっていったもので、本書内容から見ると、著者としては鉄氏を挙げるのが自然である。「理書」とは、ある事柄について補足または条件、理由などを書いたものである。それが序文などの形で別紙にあるのではないとすると、ここでは注釈を意味するとも考えられる。しかし、本書の大量の注釈のすべてか、または部分のどこに関わったのかはわからない。本文中別筆のように思われるものは、中巻内裏図下段の書き込みである。これ以外のものは明らかに違う筆跡とはいいいがたく、本書は注を含め、ほとんど全文が同一人の手になるといってよいように思う。

跋文の後に添えられた歌友須崎氏清方の詞書と歌は、「ある和歌の友へ此愚草見せ侍りしに、見果て乃ち詞書し一首よみて贈れり。むかしよ

り歌文に心よせし程有て、つゝきうるはしく心はへのおかしさに爰に写しと、めり」^{（下74オ）}とあって、これも著者が紀行に書き写して加えたというのである。本書全体が浄書されたものであるようだ。

本書についてなお考えるべきことは多いが、著者なる人は歌枕の地、難波で二もと三もと枯れ声を抜き、岸の姫松を一葉、太宰府天満宮の梅の花五輪などを土産にと持ち帰る、つつましやかな風流の人でもあったことを書き添えて、ひとまず稿を閉じたいと思う。

謝辞 貴重な文書を閲覧させていただき、ご配慮を賜りました流通経
済大学図書館に厚く御礼申し上げます。

〔注〕

1 坂板耀子「貝原益軒『東路記』『己巳紀行』と江戸前期の紀行文学」（新
日本古典文学大系『東路記 己巳紀行 西遊記』岩波書店、一九九一年、
四二一頁）。

2 「御年譜集要抄」（『福岡県史』近世資料編 年代記（一）一九九〇年、
二八頁）。

3 この後も上杉吉憲を「民部大輔殿」と通称している。

4 米沢温故会『上杉家御年譜』七（原書房、一九八八年、八五頁）。

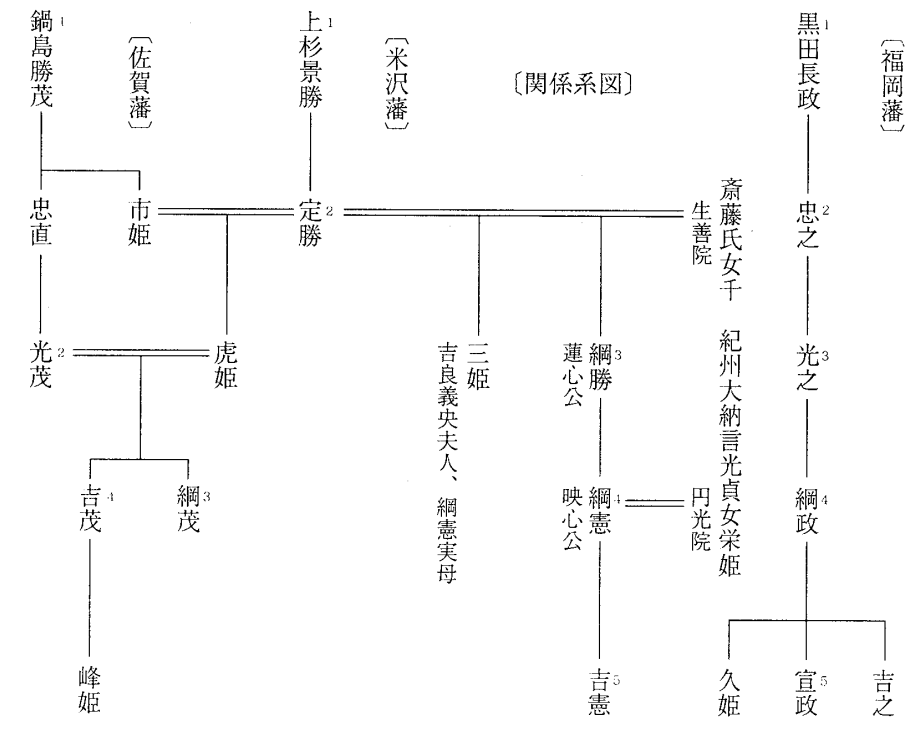
5 この屋敷は宝永五年（一七〇八）大火で類焼し、同七年再建されるが、
この年西村久左衛門は藩への多額の借金のため召し放ちになる。その後も
屋敷は西村久左衛門の手代小森次右衛門が名義人となっている。（『米沢市
史』第二巻、近世編1、一九九一年、一九〇―一九一頁）。本紀行中には、小
森次右衛門の名も見える。

6 円光院は先代藩主、綱憲の正室栄姫（紀州大納言徳川光貞娘）で吉憲の
養母である（吉憲実母は茨木氏娘要。吉憲は栄姫の養子となる）。生善院

- (近衛家司齋藤内匠本盛娘千)は第二代藩主、定勝側室で、綱勝や吉良上野介義央に嫁した三姫の生母である。定勝は正保二年(一六四五)四十二歳で没する。綱勝は八歳で家督を継ぐが、世子なきまま寛文四年(一六六四)、二十七歳で急逝する。そのため綱勝妹三姫が嫁いだ吉良家長男、綱憲を二歳で養子に迎えて藩主としたが、藩領地三十万石は半減される。藩は、元禄十四年(一七〇一)に江戸城大廊下で起こった赤穂事件の対応にも苦慮した。吉憲の弟、義周が吉良家の養子となり(元禄二年(一六八九)、家督していたからである(『米沢市史』第二卷 近世編1、三九一―四二二頁))。
- 7 『米沢市史』大年表・索引(一九九九年、一二二、一二三頁)。
- 8 『御年譜集要抄』(『福岡県史』近世資料編 年代記(一)三一頁)。
- 9 『米沢市史』大年表・索引(二二四頁)。
- 10 『土佐日記』(日本古典文学大系『土佐日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』岩波書店、一九五七年、四四頁)。
- 11 頼阿「井蛙抄」(『歌論歌学集成』第十、三弥井書店、一九九九年、二二九頁)では、「二首」ではなく「二句」。
- 12 今井金吾監修『道中記集成』別巻三(大空社、一九九八年、七五―一〇四頁)。
- 13 「京童」(『日本名所風俗図会』7、京都の巻I、解説、角川書店、一九七五年、四六七頁、六頁)。
- 14 前掲書(六一六〇頁)。
- 15 三田村鳶魚の説(今井金吾監修『道中記集成』別巻三、九一頁)。
- 16 この地図は「延宝六年(一六七八)戊午年三月吉日刊 大日本図鑑」(栗田元次編『日本古版地図集成』第十六図、博多形象堂、一九三三年)に似る。南を上しているものは他にもあるが、「これらはむしろ例外と見るべく、貞享以後のほとんど全部の日本図は北を上している」という(秋岡武次郎『日本地図作成史』鹿島研究所出版会、一九七一年、五三頁)。
- 17 西川如見『華夷通商考』増補本五巻は、宝永五年(一七〇八)刊(『日本水士考・水士解弁・増補華夷通商考』、岩波書店、一九八八年)。
- 18 藤木久志「二家臣団の編成」(安部洋輔編『上杉氏の研究』戦国大名論集9、吉川弘文館、一九八四年、三七七頁)。
- 19 黒金泰忠(永禄七年(一五六四)―寛永十二年(一六三五))は、もと鳥倉孫左衛門泰忠といったが、藩主景勝の命により黒金上野介景信の跡式を相続した(『三百藩家臣人名事典』第一巻、新人物往来社、一九八七年)。
- 20 鉄孫左衛門景泰(『上杉家御年譜』二十四、四二頁)。
- 21 丹羽基二『姓氏家系大辞典』(新人物往来社、二〇〇二年)。
- 22 千坂浅右衛門高就(『上杉家御年譜』二十三、二七七頁)、『上杉家御年譜』六にはその務めの記事等が見える。
- 23 大河内忠右衛門甥、須崎六郎右衛門清方(『上杉家御年譜』二十三、四八四頁)。
- 〔参考文献〕
- 今井金吾監修『道中記集成』(大空社、一九九八年)
- 『日本名所風俗図会』7、京都の巻I(角川書店、一九七五年)
- 板坂耀子『近世紀行集成』(叢書江戸文庫、国書刊行会、一九九一年)
- 新日本古典文学大系『東路記 己巳紀行 西遊記』(岩波書店、一九九一年)
- 日本古典文学大系『土佐日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』(岩波書店、一九五七年)
- 『東海道読本』(川崎市市民ミュージアム、一九九四年)
- 堀晃明『「天保懐宝道中図で辿る―広重の東海道中五拾三次旅景色』(人文社、一九九七年)
- 森川昭『東海道五十三次ハンドブック』(三省堂、一九九七年)
- 菊地真・小林祥次郎編『東海道ちよつと物知りウォーキング』(勉誠出版、

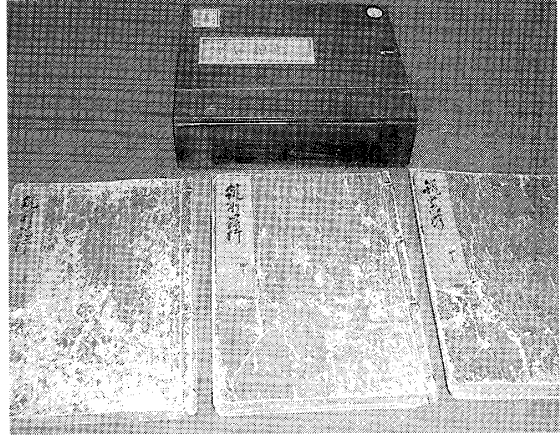
- 二〇〇一年)
- 米沢温故会『上杉家御年譜』六・七・二十三・二十四(原書房、一九八八年)
- 『米沢市史』第二・三卷、近世編1・2(一九九一、九三年)
- 『米沢市史』大年表・索引(一九九九年)
- 『山形県史』資料編16、近世史料1(一九七六年)
- 『米沢市史編集資料』第九号(一九八二年)
- 安部洋輔編『上杉氏の研究』戦国大名論集9(吉川弘文館、一九八四年)
- 豊田武編『会津藩家世実記』第一卷(吉川弘文館、一九七五年)
- 豊田武編『東北の歴史』中巻(吉川弘文館、一九八一年)
- 『福岡県史』近世資料編 年代記(一)(一九九〇年)
- 『福岡県史』通史編 福岡藩(一)(二)(二〇〇〇、〇二年)
- 『佐賀市史』第二巻、近世編(一九七七年)
- 『佐賀県史』中巻、近世編(一九六八年)
- 藤野保編『佐賀藩の総合研究―藩政の成立と構造』(吉川弘文館、一九八一年)
- 『新訂寛政重修諸家譜』第七・十二・十三巻(統群書類従刊行会、一九六五年)
- 小川恭一編著『江戸幕藩大名事典』(原書房、一九九二年)
- 新井白石『新編 藩翰譜』(新人物往来社、一九七七年)
- 『三百藩家臣人名事典』(新人物往来社、一九八七年)
- 丹羽基二『姓氏家系大辞典』(新人物往来社、二〇〇二年)
- 黒川道祐『雍州府志』(新修京都叢書、第10巻、臨川書店、一九六八年)
- 立川美彦『京都学の古典』『雍州府志』(平凡社、一九九六年)
- 西川如見『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』(岩波書店、一九八八年)
- 栗田元次編『日本古版地図集成』(博多形象堂、一九三三年)

秋岡武次郎『日本地図作成史』(鹿島研究所出版会、一九七一年)





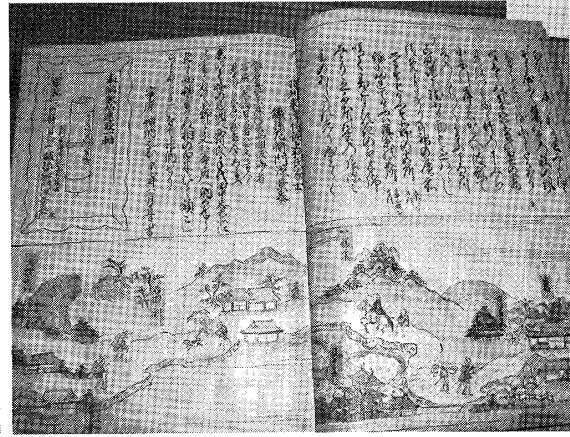
上卷 冒頭



『筑前紀行』上、中、下巻



上巻 歌仙

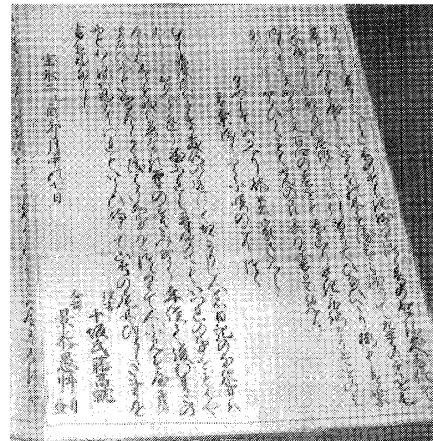


中巻 福岡城、響灘

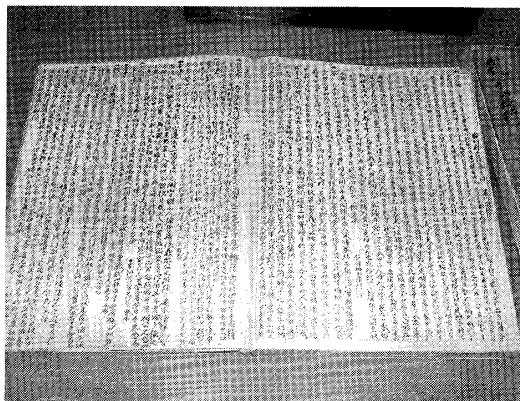
祭魚洞文庫『筑前紀行』について



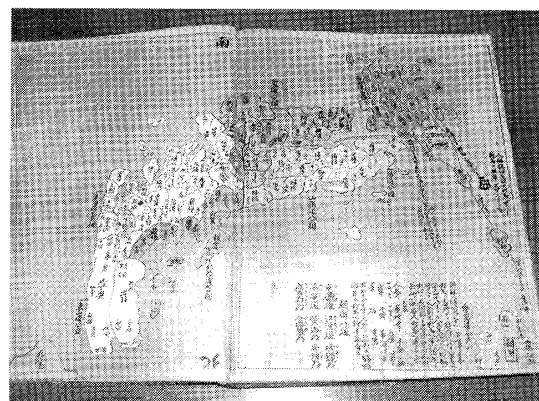
下巻 東寺



下巻 跋文



上巻 末尾『雍州府志』抜き書き



下巻 末尾「日本地図」